

## 猫柳

池松 孝子

遙か昔のことになった。どういう理由だったか忘れたが母のお花の稽古について行った。三月の初めだったと思う。数人のベテランの中にちよこんと座って稽古をじつと見ていた。しばらくして先生から「この花材で生けてみない？」と勧められた。それが猫柳とチューリップだった。かわいい銀色に輝く穂は、いつも河原で見るとは違っていた。猫柳は春の訪れを告げる樹木であり、さらに枝ぶりが美しいので花材に向いている。生け花としての出来とは関係なく、急に大人になったような体験をしたと今も記憶にある。

猫柳は日当たりの良い場所、水辺などの湿り気を好む。暑さ寒さに強い木だ。あの銀白色のふわふわした猫のしっぽのような花穂は猫の尾に見立てたのだろうが、よくぞその名をつけたものだと感じる。しかし「猫柳」の名が定着したのは明治以降だという。それまでは「川柳」と呼ばれていたとか。調べてみると、猫柳には銀猫柳、ピンク猫柳、ゴールデン猫柳、黒猫柳などの品種があるそうだ。

ヤナギ科ヤナギ属の落葉低木で、他の種の柳に比べても川の上流つまり山間部から下流の町中まで、水際に根本が水に浸かっているような所によく育つ。柳は強い木で北海道から九州まで広く自生している。地植えでも鉢植えでもよく育つ。土に突き刺しさえすれば簡単に根づく。それだけ身近な木だったのだ。

水ぬるむ小川の岸のねこやなぎ 銀いろの穂をはじき初めたり

鳥海 昭子

子供のころ「猫柳は屋敷の庭に植えてはいけない」と聞いた。もちろん迷信であるが、それがなぜなのかと祖母に尋ねたことがある。その答えは昔々、猫柳の枝を卒塔婆として使っていたことがあったからだというものだった。また、柳の枝でお盆に使う「盆箸」を作ったことも影響しているのではないかと。こうしたことから縁起が悪いと考えたのだろうか。

水温むまさに「光の春」、小川の川面がキラキラと輝く傍には銀色の猫柳があった。故郷の景色は懐かしく眩しい。